

國學院大學學術情報リポジトリ

新出のB・H・チェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討：資料紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千々和, 到, 平藤, 喜久子, 福島, 直之, 石井, 敦, 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001701

資料紹介

新出のB・H・チェンバレン、 E・B・タイラー宛書状の紹介と検討

千々和 到	平藤喜久子
福島 直之	石井 敦
星野 靖二	

1 チェンバレンコレクションを調べる

千々和 到

オックスフォード大学のピットリヴァーズ博物館に、世界中の人類学的な資料がたくさん保管されていること、その中には日本の資料もあることなどは前に聞いていた。しかしそこに、私のような視野の狭い人間が目にする資料があるとは、少しも思っていなかった。

ところが数年前まで実施された21世紀 COE プログラムの國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」メンバーに加わって外国に所在する日本の護符の調査を担当することになってから、宮家準氏のご教示などでここには明治時代にお雇い外国人として海軍兵学校や東京帝国大学で英語を教え、日本の国語学の基礎を据え、多くの研究者を育てたバジル・ホール・チェンバレンが集めて送った大量の護符(おふだ)があることを知った。おふだ以外の資料も含めると、1400点を超えるという。COE の5年間の期間中は、パリのコレージュ・ド・フランスに保管されていたベルナール・フランク氏のおふだコレクションの調査だけで手一杯だったことなどもあって、私がオックスフォードを訪ねる事はかなわなかったのだが、2007年春に COE の事業が終了したあと、幸い引き続いて私を研究代表者とする「日本における護符文化の解明」のプロジェクトが科学研究費基盤研究(B)(課題番号

19320104)に採択されたので、2008年11月と2009年11月とに、その「おふだ」の調査を実施することができた。2008年には私と研究分担者の古山正人氏(本学教授・古代ギリシア史)・科研事務局の熊谷博史氏(本学大学院生)、2009年には私と嶋津宣史氏(神社本庁)・星野靖二氏(本学助教)が参加し、2回とも現地ではオックスフォード大学のニール・マクリン氏(McLynn, Neil)と夫人の富佐・マクリン氏が親身な心配りをしてくださり、とりわけ富佐氏は通訳をかねて調査の全日程に参加してくださった。また博物館側のこの資料の主任はジュリア・ニコルソン氏(Nicholson, Julia)で、シャーン・マンデル氏(Mundell, Sian : 2008年)とケイト・グリナウェイ氏(Greenaway, Kate : 2008・09年)、エリン・ボーネマン氏(Bornemann, Elin : 2009年)が私たちの調査に立ち会い、資料の出納やさまざまな要望に応じてくださった。

そのおふだ調査の概要はすでに千々和編『日本の護符文化』(弘文堂、2010年)の「「おふだ」を残してくれた外国の知識人たち」でも触れたので、ここでは繰り返さないが、2008年の調査の中で、ニコルソン、マンデル両氏が私たちに関連資料として見せてくれたのが、本稿で紹介するチェンバレンのエドワード・バーネット・タイラー宛書簡10通である。

タイラーはピットリヴァーズ博物館の初代館長で、当時世界的に著名な人類学者であった。

そのタイラー宛に、日本にいたチェンバレンが1883年3月に初めて書簡を出したのが、その1通目である(写真1)。内容から、チェンバレンはそれまでタイラーとは面識

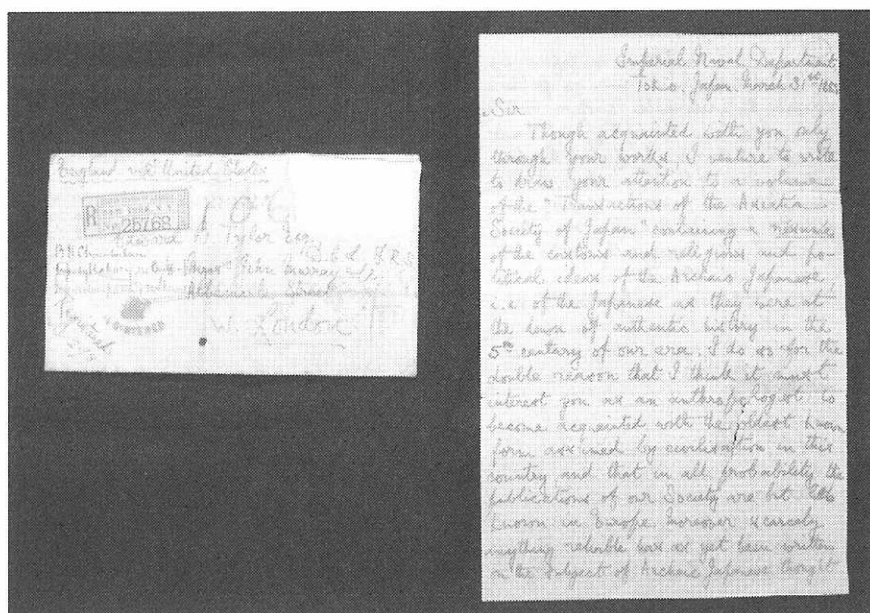


写真1 チェンバレンのタイラー宛書簡(一通目、1883年3月31日付)
Pitt Rivers Museum 所蔵(Tylor Ms. C1 Chamberlain)

も文通の関係もないことがわかり、自分の論文を読んでもほしいことを願い、日本語の発音表記などについて所見を述べている。これに対するタイラーからチェンバレン宛返信の存在はすでに知られており、それは後掲の平藤氏の文章に明らかだが、本書簡の「発見」によって、二人の交流の端緒を明確にしえたことは、意義深いものと思われる。また、チェンバレンは日本語表記のローマ字化を推進しようとした論者としてよく知られており、第六信ではそのことを主張しているが、この第一信では「現代の日本語は、ローマ字の方が正確です。但し、漢字の方が正確に示すことができる場合もあ」と述べている点も、注目に値しよう。

私たちの主要なテーマである護符(おふだ)については、1885年11月の第八信に見られ、「ご希望の護符その他は、早速入手いたします」とあり、明らかにタイラーからの依頼によって収集、送付が行われたことがわかる。

チェンバレンコレクションの、とりわけ護符コレクションの形成にあたっては、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の果たした役割が大きかった、と言われる。そのことは、チェンバレンとハーンとの往復書簡を見ることで理解

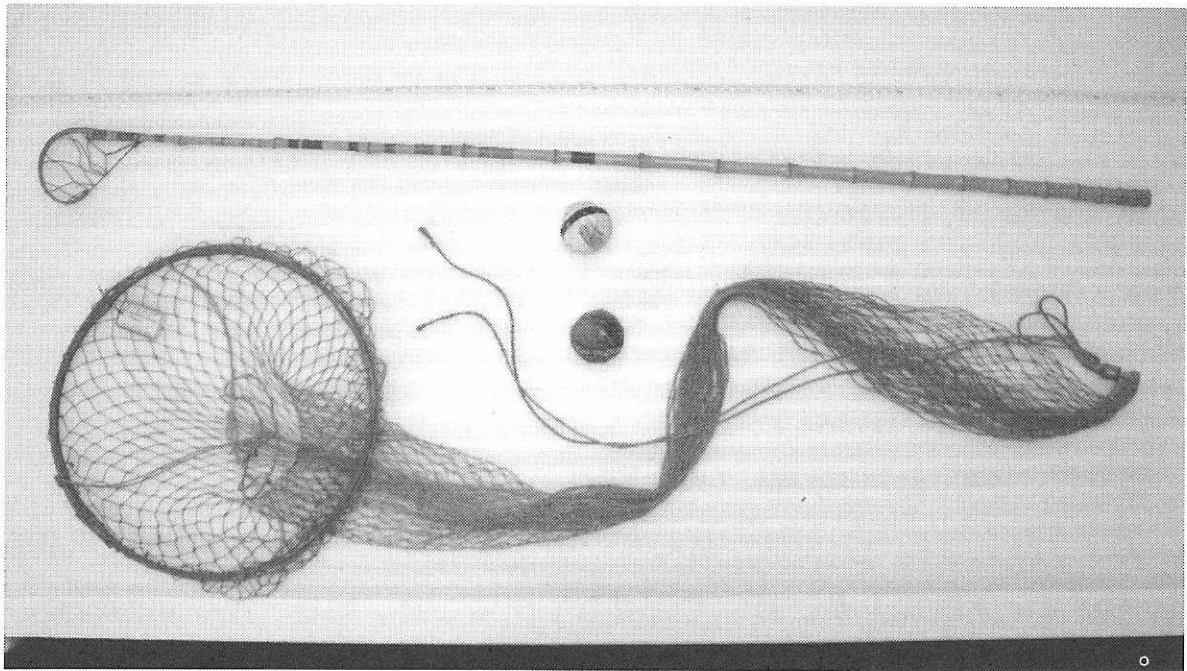


写真2 チェンバレンの送った打毬の道具(ラケット、ボール、ゴールネット)

日本の打毬とイギリスのポロは、騎乗して球をゴールにいれることは同じだが、ルールは異なる。打毬では球は紙製で、ラケットの先端で保持して一人ずつゴールネットに投入する。

Pitt Rivers Museum 所蔵(1910.42.10~12)

でき、今回の調査でも、ハーンが住み、活躍した出雲の社寺の護符がもっとも集中しており、またしばらく職を得ていた熊本の護符も多いと言えることから十分確認できると言えよう。そのことは、すでに坂出祥伸氏「明治の「おふだ」と、あるイギリス人」(『大法輪』2004年9・10月号)や小泉凡氏「イギリスに渡った出雲の護符」(『山陰民俗研究』13、2007年)にも詳しい。ただ、ハーンがチェンバレンと出会うのは1890年4月のことであり(楠家重敏氏『ネズミはまだ生きている』(雄松堂、1986年))、それ以前にチェンバレンが護符の収集を始めていたことも、あらためて確認できたわけである。比較的早期の納入品の中に、伊勢神宮や富士山、金華山など、むしろチェンバレンが興味を持っていた所の護符が多いように思えることは、それを裏付けていると言えよう。

なお第八信では、護符に引き続いて「神聖なる火起錐は、残念ながら全く手に入れることはできません」とある。タイラーがチェンバレンに収集を依頼し、このとき入手できなかったが、やがてハーンが入手した出雲大社の火起錐は、現在、博物館の1階に展示されている。

第六信のカルタや花札等の遊び道具、第二・三信のポロ(打毬)の道具(写真2)なども、博物館に保存されており、このコレクションはチェンバレンの主著である『日本事物誌』(高梨健吉氏の訳で、平凡社東洋文庫から刊行)の記述を裏打ちする膨大な日本文化の実物資料群であって、まさに、チェンバレンが日本に滞在した明治時代の、日本の生活文化のタイムカプセルなのだ、と感じた。

最後に、本稿成立の経緯について述べる。

チェンバレンについては、私たちの調査の中間報告会を兼ねて、2009年2月21日に國學院大學において研究会を開催した。当日、千々和が調査の中間報告をし、宮本誉士氏が「チェンバレンと和歌—佐佐木信綱との関わりを中心に—」の題の報告を行い、平藤喜久子氏が「チェンバレンの古事記翻訳」の報告を行った。このうち新出のチェンバレン書簡と関わりの深い平藤

氏の報告をもとにした文を次章に掲載した。

ところで、紹介した書簡は小さなレター用紙に小さな字でびっしりと書き込まれた千々和にとってはとても読みにくいものだったので、ピットリヴァーズ博物館のクリス・モートン氏(Morton, Chris)に協力してもらい、タイプのテキストを作成してもらった。それをもとに石井敦氏(科研補助員、本学哲学科出身)が訳文を作成し、さらに2009年調査時に星野靖二氏が原本校訂をした。こうして新たに作成されたテキストに基づいて、福島直之氏(本学教授)に訳文の最終的な補訂をお願いした。したがって、本稿の書簡訳文は、福島氏と石井氏、星野氏の共同作業の成果といえる。忙しい中を、私の無理を聞き入れてくれた平藤氏と三人の訳者の方々、調査に関係した方々やオックスフォード大学ピットリヴァーズ博物館の方々には、心から感謝するものである。

(追記)本稿は2010年9月17日に成稿した。その後、2010年12月6日～10日に、菅浩二氏(本学准教授)と共にピットリヴァーズ博物館の3回目の調査を実施し、「おふだ」の調査はほぼ完了した。この調査中に、チェンバレン書簡一通目の写真(写真1)を撮影し、掲載を許可された。担当者のフィリップ・グローバー氏(Grover, Philip)のご厚意に感謝する。また同時に、写真3の行基焼の壺の写真は、シャーン・マンデル氏に撮影していただいた。あらためて謝意を表したい。

2 チェンバレンが生きた時代—古事記翻訳をめぐる—

平藤 喜久子

はじめに

著名な日本学者であるB・H・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)が生きた時代は、マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller, 1823-1900)やタイラー(Edward Burnett Tylor, 1832-1917)などが活躍する近代的な神話学、宗教学、人類学の草創期でもあった。実際にチェンバレンは彼らとも交流を持っていたことがすでに明らかにされているが、今回のチェンバレンのタイラー宛書簡の確認によって、その関係の一面がさらに詳しく浮かび上がってきたと考える。

チェンバレンとマックス・ミュラー、タイラーとの関係

まず、チェンバレンとミュラー、タイラー、この三者の交流について、わかっていることをまとめておく。

楠家重敏によれば、公刊はされていないが吉阪俊蔵がチェンバレン関係の書簡を保管しており、そのなかにミュラーからの書簡が6通含まれているという。この手紙の存在により、二人の交流が行われていたことが知られる⁽¹⁾。

またイギリスのNational Archivesが所蔵しているアーネスト・サトウがアストンに宛てた手紙によれば、目の病気のため1880年に海軍兵学校を休職して一時帰国していたチェンバレンは、オックスフォードでミュラーと過ごしていた⁽²⁾。1881年1月のサトウの書簡には、その頃チェンバレンは古事記を翻訳中であつたと記されていることから⁽³⁾、ミュラーのところに滞在していた時期と古事記の翻訳が行われていた時期は重なっていることがわかる。加えて1892年12月にチェンバレンがラフカディオ・ハーンに宛てた手紙によると、チェンバレンはミュラーに古事記の翻訳を勧めたが、ミュラーはすぐにその翻訳をあきらめたと記されている⁽⁴⁾。こうした状況からチェ

ンバレンによる古事記翻訳の背景にはミュラーが少なからず影響を与えていたと考えられる。

タイラーもチェンバレンとの交流が確認されている。オックスフォードのピットリヴァーズ博物館には、館長を務めたタイラーによるさまざまな収集資料が収められている。そのなかにはタイラーがチェンバレンに依頼して集めた日本の民具やお札なども多数含まれる。

これら日本からの収集物の多くは、ラフカディオ・ハーンによって集められたものであることが、チェンバレンとハーンの往復書簡によって確認できる。たとえば1890年の7月にハーンはチェンバレンに精霊船を送り、タイラーに送ってはどうかと述べている⁽⁵⁾。また同年10月のチェンバレンからハーンへの手紙では、ハーンからのお守りなどがタイラーの欲しがりそうなものなので、彼に送ると述べるとともに fire drill すなわち火起錐を博物館のために入手できないかとタイラーから問い合わせがあったと記している⁽⁶⁾。

タイラーとチェンバレンとの書簡については、タイラーから送られたものを所蔵していた吉阪俊蔵が1955年に「人類学者タイラー博士の手紙」と題して内容を紹介している⁽⁷⁾。吉阪はタイラーの手紙を12通「秘蔵して」おり、そのうち10通をこの論文のなかで紹介した。彼が紹介した手紙は、1885年7月5日から1894年の10月までのもので、おもな内容はチェンバレンから送られた日本の民芸品等へのお礼や、それについての意見、日本やアジアの宗教的な行事等についての学術的な意見となっている⁽⁸⁾。このようにタイラーとチェンバレンの間には、ピットリヴァーズのコレクション形成を軸として交流があったことがわかっていた。

今回確認されたピットリヴァーズ博物館所蔵のチェンバレンからタイラーに宛てた手紙は、1883年から1896年のものであり、そのうちのいくつかは吉阪がすでに紹介したタイラーからの手紙とぴったり対応する内容になっている。

1883年3月31日付けのチェンバレンの書簡は、冒頭で「ご著書でしか存じ上げないのですが、突然お手紙を差し上げることをお許し下さい」と述べ

ていることから、彼がはじめてタイラーに送ったものと考えて間違いないだろう。この書簡では、チェンバレンが関わっている日本アジア協会の紹介をし、その上でタイラーの著書 *Anthropology* のなかの日本について言及した部分について感想を記している。この手紙をきっかけに二人の交流ははじまり、チェンバレンはタイラーに対し、さまざまな日本の資料と情報を提供するようになった。二人の交流がはじまった経緯が明らかになったという点でこの書簡はきわめて意義があるものといえよう。また、その1883年がチェンバレンが古事記の英語訳 *The Kojiki Records of Ancient Matters* を刊行した年であることも興味深い。

その後のチェンバレンの手紙からは、数珠や囲碁、チェス、双六、かるたの道具を送ったこと、また水葬に関する資料を送ったことなどがわかる。タイラーが世界中から収集していたポロに類する競技の道具の一つとして、打球の用具を送ったことも記されている。

チェンバレンの古事記翻訳について

幕末の開国を機に、日本文化は海外に広く紹介されるようになった。古事記も例外ではなく、多くの外国人たちに注目され、彼らによる翻訳や研究もはじまる。古事記のもっとも早い外国語訳が登場するのは、1883年のことである。イギリス人のチェンバレンによる英語訳 *The Kojiki Records of Ancient Matters* とフランス人のレオン・ド・ロニ(Leon Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914)による仏語訳である。とくにチェンバレンによる翻訳は、後世の日本学にも大きな影響を与えることになった。

ではここであらためてチェンバレンの古事記翻訳について、ミュラーとタイラーとの交流を踏まえ、彼らの影響について考えてみたい。

まずチェンバレンの古事記観、および古事記翻訳の特徴を簡単に確認しておきたい。

『日本事物誌』(*Things Japanese*)では「これ(古事記)はときどき日本人の聖書であるといわれる。なぜならこの本の中には日本国民の神話やもっとも

古い歴史が書かれているからである。しかし、この本は道徳的・宗教的な教えを含んでいない」と述べている⁽⁹⁾。この点はチェンバレンの翻訳と同じ年に古事記上巻のフランス語訳を出版したレオン・ド・ロニが、古事記を聖書やヴェーダ、クルアーンなどと同様に聖典であると位置づけたことと対照的である。

彼の翻訳で目に付くのは、ところどころラテン語が出てくるという点である。それは伊耶那岐神と伊耶那美神の結婚の場面などで、チェンバレンが猥褻だと感じた箇所である。そういった場面をチェンバレンは英語ではなくラテン語によって翻訳している⁽¹⁰⁾。そこには、当時、すなわち19世紀ビクトリア朝の道徳意識の反映も読み取ることができるだろう。

チェンバレンは *The Kojiki Records of Ancient Matters* の Translator's Introduction のなかで、古事記が古代日本の神話や習慣、言語、歴史を知る上でもっとも重要な資料であると述べ、その上で、彼の古事記の翻訳がヨーロッパの研究者によって引用され、原文を調べる際の参考になることを望むと述べている。原文を引用しておきたい。

It is hoped that the true nature of the book, and also the true nature of the traditions, customs, and ideas of the Early Japanese, will be made clearer by the present translation the object of which is to give the entire work in a continuous English version, and thus to furnish the European student with a text to quote from, or at least to use as a guide in consulting the original.

この箇所は、チェンバレンの古事記翻訳の目的を端的に表現したものであり、また彼の翻訳への姿勢を述べたものといえるだろう。

彼の翻訳の特徴としては、神名や地名を、漢字の一字一字の意味を翻訳して表記するという点を挙げることができる。例えば天之御中主神は、Deity Master-of-the-August-Centre-of-Heaven、天照大神は Heaven-Shining-Great-August-Deity と表記されている。こうした神名、地名の翻訳への対応は訳者によって異なる。ちなみにチェンバレンと同時代のアストンは、日本書紀

の翻訳の際に、神名の読みをローマ字で表記し、さらに神格を解釈した呼称を使用している。たとえば天照大神は Ama-terasu-no-oho-kami とし、さらに文中では Sun goddess と表現される。これは天照大神の神格を太陽神と解釈したことによる呼称である。

文体は、Translator's Introduction でも「素朴な文体」であることを心がけたと明言しているように⁽¹¹⁾、ほぼ直訳となっている。解釈や訓読にあたっては本居宣長を高く評価しており、古事記伝に習う形で翻訳が行われている。

このように素朴な文体で直訳、神名地名の一字一字を翻訳するという特徴は、ヨーロッパの研究者が、この翻訳をもとにさらに研究を進めることができるようになるための翻訳であるという先に引用した彼の翻訳姿勢のあらわれといえるのではないだろうか。つまり、チェンバレンの解釈した古事記ではなく、漢字で記された古事記のそのままの姿を漢字のわからない人々に伝えたい、そのための翻訳ということである。

すでに述べたようにチェンバレンが古事記を翻訳した19世紀後半は、神話研究も盛んになっていた時期であった。チェンバレンは高名な神話学者であったマックス・ミュラーと交流をもち、また1883年の手紙によれば、以前からタイラーの執筆したものも読んでいたことがわかる。そこでチェンバレンの翻訳に、マックス・ミュラーやタイラーの影響が見られるかどうかを確認しておきたい。ミュラーについては、名前は挙げられていないものの、彼の基本的な学説—神話とは、そもそも日の出や日没といった太陽の動きを中心とする自然現象を表現していた言葉が、次第に本来の意味が忘れられ、誤解されたりする中で発生したものである—に関する言及がみられる⁽¹²⁾。ただし、その研究視点に立脚しているわけではなく、翻訳にも活かされていない。やや批判的な印象を受ける。

タイラーについても Translator's Introduction のなかで彼の代表的著作 *Anthropology* からの引用が一箇所見受けられるが⁽¹³⁾、詳しく論じられているわけではなく、翻訳にも影響を看取することはできないようである。なお、松村一男はチェンバレンについて「その神話理論はタイラーに近く、従って

ミュラーに批判的である」と述べている⁽¹³⁾。

このようにチェンバレンが二人の研究に言及している箇所は少なく、そのためかチェンバレンの翻訳は神話学の文脈に位置づけられてはこなかった。おそらくこのことは、先に述べたように古事記を解釈を加えずに提供したい、なるべくそのままの古事記を伝えたいというチェンバレンの翻訳の姿勢と関わっている。たとえばアストンのように天照大御神を Sun goddess(太陽女神)とするのではなく Heaven-Shining-Great-August-Deity とするという意味である。そうしたチェンバレンの神話学への距離は、決して神話学からの影響がないということではなく、彼なりの学問への貢献のスタイルであったと考えられる。

おわりに

紙幅の関係で十分な考察はできなかったが、これまでみてきたチェンバレンの翻訳の特徴、ミュラーとタイラーとの交流から、あらためて日本学者チェンバレンについてまとめてみたい。

チェンバレンが日本学者として活躍していた19世紀後半は宗教学、神話学の草創期でもあった。研究者たちはヨーロッパ以外のさまざまな地域から新しい資料を貪欲に求め、解読、分析をすすめていた。その時代を代表する研究者であったマックス・ミュラーとタイラーも、開国したばかりの国である日本に目を向け、情報、資料を欲していた。

そのような状況のなか、チェンバレンは日本の専門家として登場し、ミュラー、タイラーの知己を得、イギリスに向け日本の情報を発信していた。とくに今回見つかったチェンバレンがタイラーに送った書簡からは、数少ない日本の専門家、情報提供者として学界に寄与しようとするチェンバレンの姿勢を読みとることができる。

チェンバレンの古事記翻訳の目的は、古代日本の習慣や伝統、思考などを明らかにし、英訳することによってヨーロッパの研究者に引用されたり参照されたりすることであった。ほとんど直訳で、解釈を交えない翻訳の背景に

は、チェンバレンが日本の情報を加工せずにそのままの形でヨーロッパの研究者に提供するという意識のあらわれであろう。

古事記翻訳の使命と収集資料の送付は、別の形をとってはいるが、いずれもチェンバレンの日本学者としての姿勢をあらわすものといえよう。

註

- (1) 楠家重敏「チェンバレン書簡の研究(1)」『武蔵野英米文学』VOL.21、1989年 15-28頁。
- (2) National Archives 蔵、所蔵番号 PRO30/33, p.132.
- (3) 前掲資料, p.129.
- (4) 小泉一雄編 *More Letters From B.H.Chamberlain to Lafcadio Hearn*、雄松堂、1936年。
- (5) Elizabeth Bisland, *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin, 1906、所収、1890年7月の書簡。
- (6) 前掲小泉一雄編著参照。
- (7) 吉阪俊蔵「人類学者タイラー博士の手紙」『読書春秋』第6巻7、8月号、1955年 27-30頁。
- (8) 前掲吉阪論文。
- (9) B.H. Chamberlain, 高梨健吉訳『日本事物誌』2、平凡社、1969年 30頁。
- (10) Chamberlain, 1883, pp.22-23.
- (11) Chamberlain, 1883, p. iii .
- (12) Chamberlain, 1883, p.lXX v .
- (13) Chamberlain, 1883, p.lXXX i .
- (14) 松村一男「日本神話研究における欧米研究者の貢献」日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月5日、於東洋大学、発表資料。

3 B・H・チェンバレンからE・B・タイラーへの書簡

福島 直之 石井 敦 星野 靖二

[1 (1883)]

帝国海軍省

東京 日本 1883年3月31日

拝啓

ご著書でしか存じ上げないのですが、突然お手紙を差し上げることをお許しください。『日本アジア協会紀要』所収の小生の論文に、お目を通していただきたく、筆をとりました。この論文の内容は、5世紀、まさに歴史の始まろうとする時期の、日本の習俗や宗教・政治思想についての概要です。こうして筆をとりました理由は2点あります。第1は、日本の最古の文明が、人類学者であられる先生のご興味を引くに違いないと考えたからであり、また日本アジア協会の存在が、ヨーロッパではほとんど知られていないからでもあります。第2は、古代日本の思想や風習については、アーネスト・サトウ氏の論文以外は、ほとんど信頼がおけませんし、サトウ氏の論文にしても、その対象分野はごく限られているからです。[Satow, Ernest : 1843-1929、英外交官]。ヨーロッパ人の旅行記は(バード女史 [Bird, Isabella Lucy : 1831-1904、英紀行作家] のように、実際に見聞したものを書いた場合を除けば)、時代錯誤と誤謬に満ち溢れております。また、日本人自身は、批判精神に欠けているため、自らの習俗についてさえも、その言に信頼をおくことができません。

この機会を利用いたしまして、先生が最近出版されたご著書『人類学』[Anthropology]の中の一、二の不正確な点について指摘することをお許し頂きたいと存じます。

I . p.172(アメリカ版) :

「日本語の文は、音声を表わす文字に分解されるが、この文字体系は、英

語の文字より正確に日本語の音を示すことができる」という件について。「fa」は、「ha」が正しく、「irofa」は、「iroha」が正しいかたちです。比較的以前に日本語について書かれた書物や、ヨーロッパの著名な著述では、「ハ」[原文テキストに片仮名で記されている]という文字は、「fa」と記されてきました。しかし、最近の英米の著作、たとえばアストン [Aston, William George : 1841-1911、アイルランド生まれの英外交官、日本書紀の英訳書で知られる] の『書き言葉話し言葉の文法』[Grammas of the Written and Spoken Languages]、ヘボンの辞書 [Hepburn, James Curtis : 1815-1911、米宣教師、『和英語林集成』 A Japanese and English Dictionary, 1867]、サトウとインブリー [Imbrie, William : 1845-1928、米宣教師] の著作などでは、「ha」が使われております。「h」に「f」を当てるのは方言によるものと思われます。——さらに、日本語の音節文字は、「アルファベット文字より、正確に」日本語を表示することができません。古代の日本語は、仮名でもローマ字でも、正確に示すことができますが、現代の日本語は、ローマ字の方が正確です。但し、漢字の方が正確に示すことができる場合もあり、特に、現代日本語を表示する場合には、仮名やローマ字より正確なことがあります。

II.

「日本の役者は、鮮紅色の縞模様で顔面を塗っているが、こうした化粧は、かつては一般的な風習であったのだろう」。237頁のこの考察には、十分な根拠がないように思われます。『日本アジア協会紀要』第10巻補遺 XLII 頁をご覧ください。日本の演劇には、17世紀初めに、大きな展開があり、現実を誇張する表現形式がとられるようになりました。鮮紅色は、怒った男の紅潮した顔を誇張し、青黒い色は、髪分け目を剃り上げて数時間経過した時の顔色を誇張したものと思われます。能は、半宗教的な古い日本の叙情劇で、古い時代の舞踏から発展したもので今でも演じられますが、能の役者は、一切化粧をしません。

失礼にもお手紙を差し上げ、批判さえいたしましたが、これはひとえに日

本に強い関心を持ちましたがためです。お許しいただければ幸いと存じます。書面の中で言及しました紀要につきましては、この手紙と同じ便で、マレー氏に託すことにいたします。

敬具

バジル・ホール・チェンバレン

古典文学博士、英国王立協会会員 エドワード・B・タイラー殿 [Tylor, Edward B.]

[2 (1883)]

東京 日本

1883年10月4日

拝啓

ちょうど夏の旅先で、お手紙を受け取りました。東京に帰ってから、ポロ[打毬 写真2]のラケットとボールを入手しました。間もなくお送りする予定です。ラケットは本体が長いので、ラケットだけを送ると、送料が高くなってしまいます。二三ヶ月待っていたけるものと存じます。それと申しますのも、ラケットと



写真3 行基焼の一つ

アストンがチェンバレンを通じて送った行基焼は、13点が保存されている。日本では、一般に須恵器の名で知られる古代の焼物である。

Pitt Rivers Museum 所蔵(1896.78.1)

ボールはとても安いので、ネットとその他の物全部揃えて、1セットをお送りしてもご承諾いただけるのではないかと思ったからです。この荷物の発送が済みしだい、いくら立て替えたかを、お知らせいたします。——ところで、鼻笛のことですが、調査したかぎり、日本で使われた形跡はありませんでした。人と動物のテラコッタ人形(いわゆる土人形)に関しては、残念ながらお知らせしかありません。神戸のイギリス領事で、日本の古墳とドルメンの第一人者であるアストン氏によると、土人形はとても数が少なく、完全な形で残っているものは、3、4体に過ぎないそうです。ですから、入手することは、まず不可能です。しかしながら、アストン氏が、その代わりに別の提案をしてくれましたので、そのアストン氏の手紙の一部を同封します。その手紙にある「行基焼」[giōgi-yaki、写真3]は昔の焼き物です。名前の由来となった「行基」とは、ろくろを発明したか、あるいは日本に紹介した人物だと考えられます。同じ手紙にある「埴輪」は、拙訳『Ko-ji-ki(古事記)』の200頁に、載っています。アストン氏が触れているこれらの焼き物のうち当方から送るものがあれば、お知らせ下さい。ところで、先生は、亀の甲羅を焦がしたものをご希望でしょうか。神主を通して、1つ手に入れられるだろうと思います。しかし、残念ながら鹿の肩胛骨を焦がしたものは入手できません。拙訳『Ko-ji-ki』の序論22頁にありますように、そうした骨による占いは、1100年以上前に、絶えてしまっています。しかも、現在の神主がそのような昔のやり方を変えて使っているわけでもありません。ところで、古代日本の占法については、『日本アジア協会紀要』第7巻第4部425頁以下の拙論に、その研究の現状について掲載しております。これは、「神道儀式の1つについて」のサトウ氏の論文へのノートという形で書いたものです。また、これは申し上げるまでもないことなのですが、『Ko-ji-ki』についての先生の詳しいコメントに興味を惹かれただけではなく、資料が乏しいのにも関わらず、先生が極めて正しい認識に至ったことに驚愕いたしました。天の岩屋戸の物語に、「御幣」を説明できるものがあるかについては、ある、ということはいけません。しかし、この物語と、その中で語られている儀式の間には、必

然的な関係は無いように思われます。天の岩屋戸伝説の起源について、申し上げることはありませんが、「御幣」は、単に捧げ物であったものが、神秘的な価値を持つようになったものと思われます。元来、拙訳『Ko-ji-ki』の序の57-58頁で触れましたように、日本人は、非常に貴重であると見なしたものの、たとえば布地などを神々に捧げました。それを、後になって単なる紙で代用するようになったのです。これは、カトリック教徒が聖体祭儀で、パンを饗する代わりに聖餅を用いるようなものです。しかし、天の岩屋戸伝説と御幣との関係が何であれ、先生の第2の質問に、つまり御幣とアイヌ語の「イナウォ」あるいは「イナオ」との関係については、確かなお答えができます。アイヌ人は、御幣、その他の習俗について、日本人に盲従しています。「イナオ」は、日本語で「稲の穂」を表す「イナボ」の崩れた形だと思われます。そして、これは、日本の東部、北部では依然として、捧げ物として使われています。「ヌシャ」は、アイヌ人の間で使われている「イナオ」のもう一つの形で、明らかに日本語の正しい形「幣(ヌサ)」の崩れたもので、漢語の「ゴヘイ(御幣)」に相当するものです。アイヌ人は、日本人から、「神」を表す言葉を借りただけでなく、主神として中世の英雄〔源〕義経を崇めました。そして、風俗習慣のあらゆる方面について言えることですが、借用したのはアイヌ人であって、その逆ではありません。アイヌ人が未開人で、日本人が文明人であることを考えれば当然のことです。御幣の実物は、ポロのラケットとボールの荷物に同梱して送ります。——「イロハ」とローマ字に関しては、日本語を正しく示す文字としては後者の方が優れていると今でも考えております。日本語は、音の数が少なく単純であり、特別な記号は必要ありません。「イロハ」を使う事もありますが、主として他の言語と比較する場合です。日本語は確かに難しい言語ですが、発音はさほど難しくありません。それはそうと、役者の化粧については、次回に述べたいと思います。このことで、教養ある日本人に問い合わせたところ、極めて長い説明を受けました。しかし、いつもながら、翻訳して送る価値のあるものは、含まれていません。私の言をご信頼いただければと存じます。

敬具

バジル・ホール・チェンバレン

古典文学博士、英国王立協会会員 エドワード・B・タイラー殿

[アストン氏の手紙]

タイラー博士が埴輪にご興味があるなら、簡単に入手できます。費用は送料だけで結構です。「行基焼」もご希望があれば、簡単に入手できます。タイラー博士のためでしたら喜んで何でもいたします。どうかお申し付けください。埴輪は少々嵩張ります。手元にあるものは、高さ2フィート、直径16インチ、重さ約15-20ポンドです。欠損がありますが、完全なものはまれです。東京上野の博物館に4体あります。

敬具

W・J・アストン

[3 (1884)]

東京 日本

1884年2月2日

拝啓

今回はごく短い手紙にて失礼します。この手紙が届いてからすぐに、ボードリアン図書館 [Bodleian Library] の修士 E・B・ニ科尔ソン氏 [Nicholson] 宛の荷物が届くと思います。小包は二つで、第1の包みには、ポロのラケットが入っていて、もうひとつの包には、ボールとそれを入れるネットが入っています。ニ科尔ソン氏とは頻繁に連絡を取っており、先生はオックスフォードに行かれることが多いと思いますので、ご自宅よりそちらの方へ送らせていただきます。ここまで書いたところで、別の用件が入りましたので、続きは次の便にいたします。ポロの送致の件は、これにて十分かと思われま

敬具

バジル・ホール・チェンバレン

古典文学博士、英国王立協会会員 エドワード・B・タイラー殿

[追伸]

朝鮮の扇子も手に入れたので、二、三個を箱に入れておきました。決してきれいなものではありませんが、イングランドでは珍しいものと思います。

[4 (1884)]

東京 日本

1884年2月29日

拝啓

ポロのラケット、ネット、ボールの送付について、前回の手紙で手短にお知らせしました。これらの品々は、無事到着したと思います。ポロ道具一式の代金、箱代、送料の合計は、おおよそ15シリング8ペンスとなります。決済については、個々に請求するのではなく、私が個人として一括して請求することにいたします。その方が、今回のような遠距離の場合は、私たち二人にとって都合がよいと思うからです。

品 目	s.d.	
ポロ用具	おおよそ7.0	私は、ポロ代の請求額については責任がありますが、残念ながら一ペンス、一シリングまで正確かというところ、確信できません。しかし、追って確かな額をお知らせいたします。
箱代	1.2	
イングランドへの送料	7.6	
合 計	おおよそ15s.8d	

[s. d. は、読むときにはシリング、ペンス。shillings and denarius。shillingは英語の在来語であるが、denariusはラテン語で、pennyの意に用いる]

「埴輪」と「行基焼」については、アストン氏(現在長崎領事館に転任されました)から、次のような手紙を受け取りました。「埴輪と行基焼は、タイラー博士にお送りします。但し両方とも神戸に置いてきたものですから、発送するには少々時間がかかってしまいます」。

同封の手紙は、『ジャパン・メール』[Japan Mail] の編集長である、ブリンクリー [Brinkley] 英国砲兵隊大尉からのものです。日本在住の外国人の中では、誰よりも日本の演劇について詳しい方です。ご興味がおありかと思いい同封いたしました。コメントと修正を少し加えてあります。

「御幣」については、当方の反応が遅いとお思いになっているのではと恐れております。この問題は、一見したほど単純ではありません。「御幣」を切り取る方法はいくつもあり、正しい御幣の見本を作ることに関しては多くの説明を要することが分かり、私自身驚いております。実物を見ても、その由来や使用法を知らなければ、何の意味もありません。したがって、知り合いの神主が、国内の旅行から帰ってくるまで待つて聞こうと思います。ついでに、亀甲を焦がしたものについても尋ねてみようと思います。一般に神主は、社会から隔絶されており、めったに知り合いになることはできません。その上、ヨーロッパ人にわざわざ教えてはくれないかもしれません。彼らは、ヨーロッパ人からは軽蔑されていると思っているようですから。

アイヌ文明の起源については、残念ながら確かな情報をお伝えできません。アイヌ人が家で生活している所を観察したことはありますが、次のようなこと以外は、取り立てて言うことはありません。日本や朝鮮の文献から判断すると、アイヌの文明の独創は、ごくわずかで、大部分は借り物だと思われます。実際、初めて鉄を使用したのは、2～300年前で、日本からその技術を習得したとされています。また箸、漆、語彙などについても、日本から借用しています。他方、日本人は、あらゆるものを中国から借用していて、起源をたどると、どれも、いついつの頃「中国から借用・導入されたもの」という結果となってしまう、いちいち調べるのが面倒なほどです。中国人自身も、

ヨーロッパで知られている以上に、インドから借用していると思われます。
仏教は、宗教以外に、非常に多くの影響を中国に与えたのです。

敬具

バジル・ホール・チェンバレン

古典文学博士、英国王立協会会員 エドワード・B・タイラー殿

[別の筆跡による、ブリンクリー大尉からチェンバレン氏宛の手紙。物品とともに、タイラー教授に転送された。]

チェンバレン様

日本の役者の顔の化粧法についての私の見解は、貴兄のものと一致しましたが、中国の日常生活に由来しているかどうかは分かりません。日本の伝統演劇では、初代市川団十郎(元禄時代)が、この化粧法を始めたとされています。団十郎は、関羽と張飛の演目を演ずるに当たり、中国の古書に、関羽の顔が赤縞に塗られた絵を見つけ、それを模倣しました。ここから、人物の性格を作るための化粧法が始まったのです。この化粧法は、「隈取り」と呼ばれ、^{うすぐま}「薄隈」「^{すじくま}筋隈」「^{こいぐま}濃隈」の3種類があります。元禄時代以前、日本の役者は、化粧をしていなかったことには間違いありません。この時代の山中平九郎について書かれた本を持っています。[山中平九郎：1642-1724、歌舞伎役者]そこには、彼が怨霊をイメージして鏡の前で、何時間もかけて化粧したところ、妻がその顔を見て気を失ったという話がのっています。しかしながら、歌舞伎の化粧法が、中国の日常習慣であるか、あるいは単なる化粧の強調されたものであるかどうかは、不明です。

敬具

R.A. ブリンクリー

[署名の後の追補]

火曜日

能面の一つに着色されている赤色は、隈取りとは別なものと思われます。

[チェンバレンの手紙(4)とブリンクリー大尉の手紙についてのチェンバレン自身による説明]

市川団十郎〔初代〕は、現存する役者の大きな一門〔市川流〕の創始者です。元禄時代は、紀元1688年から1704年までですが、この時代、もしくはその前の数年間は、古い日本と呼ばれ、徳川将軍の時代にあたり、「腹切り」、「外国人排斥」などが時代を画しましたが、元禄以降は古い日本は衰えていくことになります。

関羽と張飛の英語綴りは、Kwan-U と Chō-Hi で正しいのですが、中国語の正しい形は、Kuan-Yü と Chang-Fei です。二人の英雄は、紀元3世紀の初め、漢王朝の滅亡後の混乱した「三国時代」に活躍しました。関羽は紅潮した顔、張飛の顔は浅黒く、中国演劇では両者の顔の特徴を、それぞれの化粧法で表しています。聡明で博識な中国人の元官吏から得た情報では、通常、中国演劇では、現代のやわな役者では演じ得ない、武人の表情の厳しさ、戦闘性を示すために、顔と身体に化粧を施すということです。彼によると、中国では、女性は別として、日常、身体や顔に化粧を施すことはないそうです。私自身の感想としては、中国古典の中にこれに類したものはありません。ただし、詩経に、一見するとこれに近いと思われる箇所が一、二見られます。レッジ博士の考えを聞くのが、良いと思われます。[Legge, James : 1815-97、スコットランドの中国学者。四書五経を英訳]

ブリンクリー大尉の指摘については、私の日本人の友人で歌舞伎好きの役人も同様なことを指摘してくれました。彼によりますと、隈取りの始まりは、元禄時代の15～16年前、およそ1670年頃です。私自身が持っている、わずかな日本の資料でも、その事が確かめられます。『歌舞伎年代記』によると、

1673年に、初代市川団十郎が、劇的効果を狙って、「身体全体を」赤く塗る技法を思い立ったとされています。これより前には、歌舞伎役者がこの化粧法を使うことはなかったことが、絵画の資料によって確かめられています。また、演劇界では、この時代に初めてカツラが使われるようになりました。演劇は、それまでの「能」の伝統的な様式から離れ、できる限り忠実に自然を再現する、現代的な表現方法を使うようになりました。(能については、拙著『Classical Poetry of Japanese(日本古代詩歌)』23-25頁をご覧ください。能を演ずる役者は、化粧はしませんが、面を被ることはあります。)

身体を彩色する手法に関連して、刺青の習慣について調べてみたところ、紀元一世紀から二世紀にわたる中国の歴史書である『後漢書』の中に、日本人が、顔と身体に刺青を施していた、との記述を見つけました。また、刺青は身分も示していたことが書かれています。しかし、拙訳『Ko-ji-ki』の序に書きましたように、日本人の手による記録では確認されていません。中国人による外国事情の記述は、信用するには足りないと思われます。おそらく『後漢書』の著者は、アイヌ人を指していたのではないかと思います。というのも、中国人が、「毛深い」アイヌ人のことを、早い時期に聞き及んでいたことが知られているからです。私が尋ねた日本人によると、身体に刺青を施す習慣は、極めて最近のもので、信頼のできる書物『嬉遊笑覧』によれば、刺青の習慣は、ごく最近の天文年間(1532年-1555年)でも、観察されておられません(もちろん、犯罪者に押す焼印は別です)。17世紀後半(顔の彩色とカツラ装着の時代)、刺青は一種の奇習として存在したようで、18世紀には、言葉として存在したことが分かっています。日本の開国の頃、下層労働者の間では一般的に行なわれていましたが、日本政府は野蛮な習慣として、禁止しました。

[5 (1884)]

東京 日本

1884年7月10日

拝啓 タイラー博士

ポロのラケットとボールが、お気に召したようでうれしく思います。ご賢察の通り、ポロは中国から日本に入ってきました。ポロは中国唐王朝下で、盛んに行なわれていました。日本にもたらされたのは、紀元727年以前で、『万葉集』の中に詠まれています(拙著『Classical Poetry of Japanese(日本古代詩歌)』102頁参照)。その後、中世の古い記録などに、ポロへの言及が散見されます。ポロは、日本語で「打球」と書かれ、文字通りには「球を打つ」という意味です。[チェンバレンは「打球」と漢字で書いているが、一般には「打毬^{だきゅう}」]。中国語の発音は、「ta-ch'iu」である。[現在の中国語の正式なローマ字表記である拼音(ピンイン)で表わせば「dā-qiú」。中国語の発音を仮名で正確に記すことはできないが、近似的に書くなら、「ダチュウ」となろう。「d」は無気破裂音、「q」は有気破擦音である]。

「御幣」のことは、怠けているわけではありません。東洋では何事もゆっくりとしか進まないのです。「御幣」には、多くの問題があることが分かり、著名な神主である本居に問い合わせをしています。偉大な学者である本居宣長の孫に当たる人です。[本居豊穎^{とよかい}、宣長の曾孫]。本居の話では、秋になる前の回答は難しいそうです。他の事柄と同様、そもそも御幣が何であるかなど、研究しようとしたことがなかったからだそうです。回答がありましたら、お知らせいたします。

敬具

バジル・ホール・チェンバレン

[追伸]

物事の由来を調べてみると、中国起源のものと考えていたものが、さらに西方に由来することがよくあります。ですから、中国のポロが、インドやタタールに起源をもつのではないかを調査してみることは、価値がありそうです。中国人が、ポロのような激しいスポーツを考案するとは考えられないか

らです。

[6 (1885)]

東京 日本

1885年4月1日

拝啓 タイラー博士

たった今、十一個の数珠と遊具を納めた箱を、横浜へ送ったところです。そこでイングランドへ向けて船積みされます。ボードリアン図書館の学芸員ニコルソン氏宛になっています。中身の大半は、図書館向けの書籍だからです。もちろん、ニコルソン氏には私の方からも、手紙を書いておきました。残りの先生宛の荷物は、ニコルソン氏が、手渡しするはずで、数珠に関しては、『日本アジア協会紀要』第9巻第2部所収の論文が信頼できますので、同封しました。同論文の著者は、仏教一般についての知識はあまりありませんが、日本の宗教の宗派にはとても詳しい方です。引退した元船長で、生涯のほとんどを日本で暮らし、日蓮の創始した仏教宗派の宗徒となった方です。遊具に関しては、正直を言えば実物を買う方が遊び方を知るより簡単です。ゲームは得意ではありませんが、ルールを頭に入れるよう、努力します。直ぐには、先生にゲームをして頂けないのが残念です。この遊戯の情報については、『日本アジア協会紀要』第2巻所収のグリフィス教授 [Griffis, William Elliot : 1843-1928、オリエンタリスト、牧師] の論文と、同第5巻第1部所収の故チャップリン - エアトン [Chaplin-Ayrton] 女史の論文が、興味をそそることと思います。トループナー [Trübner] 書店に在庫がない場合に備えて、これらの論文を発送いたします。数ヶ月前に送って頂いた示唆に富む論文は、本当にありがとうございました。「御幣」の件は、まだ落着いております。

一つお願いがあります。私どもの「羅馬字会」の所収論文として掲載できるような、評判の高いイギリスの最近の論文があれば、お送りいただきたい

と思います。[羅馬字会：創立1885、会誌は『Romaji Zasshi』(1885-1892)]。

ローマ字は、欠点があるにせよ、習得に要する時間が少なくてすむことから、漢字より望ましい表記法である、という見解に先生は同意していただけるものと思います。仮名文字は、ほとんど使われないので、問題にはなりません。ローマ字化推進のもう一つの議論は、英語の科学技術用語をそっくりそのまま導入できる、という点です。現状では、科学技術用語は、無理やり日本語に訳していますが、ヨーロッパの原語との対応が簡単には分かりません。また、英語は、これから、日本のあらゆる学校教育で教えられることになっており、実際、すでに標準的な言語としての地位を確立しています。こう考えると、漢字より英語の方を、専門用語として利用する方が自然であり、実用的であると思われます。ローマ字の綴り方の策定委員会の委員は、東京大学の、矢田部 [名は良吉]、寺尾 [寿]、外山 [正一]、神田 [乃武] の教授の方々、宣教師のイービ [Eby, Charles Samuel : 1845-1925、カナダ・メソジスト教会宣教師]、ドイツ人のテヒョー [Techow, Hermann : 法学者、1883年来日、内閣お雇顧問、民事訴訟法を起草]、ヘボン博士と私です。[ヘボン：前出]。現在このローマ字化は政府によって推進されており、今後20年か30年の間には確たる結果をもたらすと期待しています。

同封した「水葬」についての記述は、ご興味があるでしょうか。少し前に、有名な日本の小説家である馬琴の小説を読んでおりました。[滝沢馬琴『椿説弓張月』(1807-8)]。その場面の一部が琉球になっていて、その中で度々水葬のことが触れられています。遺体を、水に流すのです。この奇習が、どの程度観察されているのかを、権威ある人に尋ねてみました。同封したものが、その全結果です。

二週間後の次の郵便で、先だっの正確な請求額代金を、お知らせします。というのも、これから国内旅行に出かけますので、今はその時間がありません。

敬具

B・H・チェンバレン

〔書状を閉じた後のメモ〕

4月1日にタイラー博士宛に送付した箱の内容物のリスト

碁盤と碁石の入った碁器2個

将棋盤と駒一袋

双六盤と駒

百人一首(一組)

いろはガルタ(一組)

紋合わせ一箱

十六六指

鳥刺一組

彩色された双六盤二点

仏徒の道衣

挟み将棋(二種類)

牡丹六指

すべて、日本語と英語の両方で名が書いてあるので、区別できると思います。

〔7 (1885)〕

東京 日本

1885年10月10日

拝啓

このメモを持参したJ・M・ジェームズ [James] 氏は、親切にも、和ガルタ〔花札のことと思われる〕を一組、届けることを引き受けてくれました。和ガルタは現在禁じられていて、郵便局員が見つけたら、没収されていたと思います。〔花札は江戸後期から禁止され、明治19年に解禁された〕。先生は、

ジェームズ氏と知り合いになることをお喜びになることと思います。氏は、日本に長く在住しており、日本語の読み書きもよくでき、さまざまな日本の問題もよく研究しておられます。先だってお送りした、仏教徒が使う数珠に関する論文も書いておられます。

敬具

B.H. チェンバレン

古典文学博士、英国王立協会会員 E・B・タイラー殿

[8 (1885)]

東京 日本

1885年11月15日

拝啓 タイラー博士

ご希望の護符その他は、早速入手いたします。神聖なる火起錐は、残念ながら全く手に入れることはできません。しかしながら、ある意味ではそれより良いものをご紹介できるかと思います。私の友人のウィリアム・ゴーランド氏 [Gowland, William] です。氏は、アストン氏と一緒に仕事をされている方で、日本考古学者としては、アストン氏よりも、大家かもしれません。氏は、長年大阪造幣局のヨーロッパ人主任局員で、ドルメン、火起錐などを、余暇時間に、趣味として研究しています。大阪が、いわば先史時代の日本の中心であったことから、この趣味はこの地に格好のものと思われます。氏は、2月の第1週に、イングランドに滞在すると思います。通常は、友人でかつ元同僚の家に滞在すると思われます。住所を記しておきます。

E・ディロン氏 [Dillon]

13 Upper Phillmore Gardens

Kensington

氏は、目下のところ、拙宅に滞在中で、日本考古学の書について、東京の

博物館の仕事を手伝っています。この仕事は、氏とアストン氏が長い間携わっています。氏はまた、出雲大社の火起錐の写真を撮って、先生に送る準備を整えている所です。

敬具

B.H. チェンバレン

アイヌの品物はまだ届いておりません。

[9 (1894)]

1894年1月3日

掛け物4点に関するメモと問い合わせ

E・B・タイラー

[掛け物は、チェンバレンとタケットから寄贈されているが、その4点の内訳は不明]

[I]

チェンバレン I [掛け物]

——二体の頭像は、目が見えますか、耳が聞こえますか。それぞれの像は男と女ですか——霊の周りを飛び交っている剣は、何ですか。剣葉樹の葉ですか。[剣葉樹：剣の形の葉、または、その葉をもつ樹。この語は、タイラーの手紙では asipattravana と記されており、その形はサンスクリット語で asi-pattra-vana 剣 - 葉 - 樹と分析される。しかし、チェンバレンの返事には、aripattavana と記されている。asi-/ari, -patta-/patta- は異形態の関係と考えられるが詳細は不明]。葉が吹き飛ばされているのは、激しい呪いのせいですか。また、これは何による罰ですか。——画の下方で阿修羅が戦っていますが、その理由は何ですか？ タケット III も参照のこと。[タケット：Tuckett, Francis Fox, 1834-1913, 英登山家、王立地理学会正会員。E・B・

タイラーの妻の兄弟にあたる。各地で収集した品々をピット・リヴァーズ博物館に寄贈]。

チェンバレンⅡ [掛け物]

——子供たちが、地蔵によって救われるのなら、石を積むことの正確な意味は何ですか。(タケットⅢ参照)

タケットⅠ [掛け物]

——これは、観音ですか、それとも剣の山の上に見える幻影ですか。

タケットⅡ

——舌が抜かれるのは、どんな罪を犯した場合ですか。

タケットⅢ

——[掛け物の] 下方の霊は餓鬼ですか。 食物が炎に転じていますから。

Ⅱ

——どんな悪行をなした場合に、[2つの鉄山の頂上を結ぶ] 網の橋を渡らなければなりません。鉄山を越える方法について詳しく教えてください。
[鉄山:八大地獄である黒縄地獄や衆合地獄にある。縄の下には熱い釜があり、剣葉樹がしげり、山が動き罪人を押しつぶす]。

——これらの掛け物では、霊が[三途の川を渡って]閻魔大王の審判を受けに行く川が描かれていませんが、私の持っている道家の描いた掛け物の複製品では、船で渡っている所が描かれています。ボウズ氏所有のものでは、歩いて渡る所が描かれています。[ボウズ: Bowes, John、1811-1885、英国の美術品収集家、ボウズ美術館創立(1869)]。馬頭と牛頭の獄卒によって引かれて行くか、または泳いで行く様子が描かれている掛け物があれば、ぜひ購入したいと思っています。

日本人の友人である高楠氏と、小崎氏に助力を求めたところ、どちらの方にも、仏教徒の天国と地獄に関する日本語の文献を探すことに尽力していただきました。そのような書は、手ごろな値段で入手できるでしょうか。[高楠順次郎：1866 - 1945、仏教学者。小崎弘道：1856-1938、神学者、牧師]。

掛け物 4 点についての質問に対する [チェンバレンの] 返事

チェンバレン I

——二体の頭像は、俱生神(くしょうじん)と呼ばれるもので、文字通りに、二体は人の出生と俱に生まれる神です。[チェンバレンは「具生神」と漢字で記しているが「俱生神」が正しい]。この名前はエイトルの仏教事典には掲載されていません。[エイトル：Eitel, Ernst Johann, 1838-1908、ドイツ生まれのプロテスタントの宣教師で、中国で活動。言及されている辞書は、Handbook of Chinese Buddhism Being a Sanskrit, Chinese Dictionary]。この男神像と女神像が、見ることと聞くことをそれぞれ象徴しているのかは、定かではありません。おそらく一方が男で、他方が女であると思われます。あるいは、二体合わせて、人全体を表わしているのかもしれませんが。

——また、天空を飛び交う剣は、もともと、剣葉樹の葉です。この葉は、大風によって空中に飛び散り、それが剣の形をとり、死人の霊をずたずたに切り裂きます。しかし、どのような悪行によってそのような責め苦を受けるのかは、確かではありません(同封して送った翻訳の第 II 部と比較してください)。[この「翻訳」が何を指すのかは不明]。

——この世で争い好きだったものは、死後阿修羅になります。

チェンバレン II

——今のところ石を積み上げる風習は、十分な説明がなされていないようです。しかし、この風習は、今でも日本の各地にあります。ある僧侶の話では、

地蔵は、死んだ子供が〔賽の河原で〕石を積み上げて塔の形にするのを手助けしているのだそうです(イングランドの子供たちが、泥のパイを作るのに似ています)。一般の人は、この風習の理由を全く説明することができません。地蔵に積み石はつきものです。つまり、風習ですから、一般の人は理由を考えたりすることはしません。教育のある知識人でも(というのも、このように信仰について客観的に尋ねる質問はほとんど理解されないため)、そのような風習は、考えたことがないと答えるか、軽蔑するだけです。

タケット I

——天空の観音は幻影です。私の情報提供者は次のようにつけ加えています。この世で姦通の不義を犯したものの霊は、剣山に送られ、その頂きに観音の姿を見ます。悪行をなした霊は、痛みに耐えながら剣山をよじ登りますが、頂上に、ようやく登り着くとその姿は消えます。そして今度は、観音が麓に現れます。霊は、それを求めて再び剣山を下ります。すると、また、観音が頂上の方に見えます。そのくり返しです。

タケット II

——この世で嘘つきであったものは、あの世で舌を抜かれてしまいます。

タケット III

——餓鬼道では、水は炎に変わります。

[この第9通目書簡の原テキストを確定するに当たってはロバート・ロルフ氏(Rolf, Robert: 本学教授)のご教示が欠かせなかった。ここにロルフ氏にお礼を申し上げます。]

[10 (1896)]

[住所の上方左手に書かれているメモ]

先生が話されたゲームに関する論文は、まだ届いておりません。 B.H.C.

[差出人の住所と手紙の本文]

4 Seamore Place

Mayfair,

London, W.

1896年11月22日

拝啓 タイラー博士

先生は、若いサヴェジ・ランドー [サヴェジ・ランドー：Landor, Arnold Henry Savage, 1865-1924、イギリスの画家、探検家、著述家、人類学者。著書に *Alone with the Hairy Ainu* (1893) (毛深いアイヌを独りで訪ねる)。祖父は詩人で著述家の Landor, Walter Savage] のアイヌの話信じてもいいかもしれませんが、その話は、西洋の大洪水神話というかたちで、ブーメランのように彼自身に戻ります。私自身にも似たようなことがありました。宣教師から聞いた、処女マリアの話が、アイヌの独創の話であるとしたアイヌ人がいました。よくご存知のように、野蛮人というものは、油断のない存在で、話さえ面白ければ満足するのです。また批判精神が全くありません。アイヌ人は、アイヌの神々がタバコを吸っていたとさえ考えています。

概して、サヴェジ・ランドーの話は、信用できません。彼は物知りですが、アイヌ語や日本語の単語を創り出してしまい、事柄によっては馬鹿げた間違いを犯しますので、検証する必要があります。アイヌについての真の権威は、バッチェラー氏しかいないと思われます。[Batchelor, John : 1854-1944、英宣教師。アイヌ研究とアイヌ伝道に生涯を捧げた。著書『蝦夷和三対辞書』]。氏は、アイヌの言語にも思想にも精通しています。唯一の欠点は、自分の弟子を最良とするあまり、時に判断を誤ることがあることです。

ゴーランド氏が、先日拙宅に滞在されたので、人類学会での採択を願い拙論を謹呈しました。この論文は琉球の農民が使った五進法の計算法についてのもので、図入りです。彼らはこの計算方法を使い税額などを一種の数標文

字で記録しました。この数標文字は、「スーチューマー」と呼ばれ、一、二年前に王立地理学会に投稿した拙論の中で言及だけはしておきました。[スーチューマー：チェンバレンは Shōchūma と記しているが、中国語の「数籌碼」に由来する。「数」は「数える」、「籌」は「竹製の数を数える棒」、「碼」は「数える道具」。呉鴻春氏(本学准教授)のご教示に負うところが大きかった。ここに呉氏にお礼を申し上げます]。しかしながら、五進法の計算法については、まだ十分には分析されていないばかりか、いかなる言語による論文でも触れていないと思います。

恥ずかしながら、アイヌに洪水神話があるかどうかは、覚えておりません。日本にはありません。

敬具

B・H・チェンバレン

凡例

カギカッコ [] は、訳者による加筆、注釈、補足書簡に対する形式上のコメント、訳文の日本語に対応する英語表記、などを示す。